

[書評]

## 日山紀彦『「抽象的人間労働論」の哲学』を読む

田中史郎（宮城学院女子大学）

### もくじ

はじめに

1. 論点の整理
2. 抽象的人間労働論をめぐって
  - (1)三つの論点
  - (2)測定問題の提起
  - (3)日山説の検討
3. 結びにかえて

### はじめに

本書、日山紀彦『「抽象的人間労働論」の哲学』（御茶の水書房、2006年）は、近年まれにみる大著である。500頁をゆうに超えるボリュームもさることながら、扱われている内容もそうである。タイトルの示すように、マルクスにおける抽象的人間労働論をめぐっての考察であることは言を俟たないが、その射程がそうであるがゆえに、論考はいわゆる「価値論」全体にわたっている。

また、そのスタイルは著者がもともと哲学を専攻されているゆえ、いわば哲学的といっ  
てよい。評者の読み方に問題があるが、論点が多岐にわたると共に散在しており、それを  
集約することもなかなか難しい。さらに、本書全体は、著者がもっとも影響を受けたとい  
う、いわゆる廣松渉流である。以上のようなことから想像できるように、一経済学徒であ  
る小生には、本書の批評は実のところ荷が重すぎる。

しかし、とりつく島がないというわけではない。本書は、何よりも『資本論』のテキス  
ククリティークであってそれを前提としており、経済学との接点も大いにあり得る。また、  
もう少し立ち入っていえば、本書は宇野弘蔵の提出した経済学、いわゆる宇野理論を意識  
したいわば挑戦的な内容になっている。廣松理論対宇野理論という構図で本書を捉える読  
者もあろう。

そこで、先走って評者の立場を明らかにしておくことが適当だろう。小生は、経済学の  
ほぼすべてを宇野弘蔵およびその学派の諸先生の書物から学んだ。廣松理論には、学ぶべ  
き点多々存在すると思いつけてきたし、広い意味での価値論の方法に影響を受けなかつ

たわけではない。たが、その理論には理解しがたい部分を感じているのも事実である<sup>1)</sup>。もちろん、このような表明は無内容であり、また、ここでいわゆる廣松理論と宇野理論との代理戦争をするつもりもない。如何なる学派を出自としようと、問題は整合的に論理を展開できるか、否かにある。とはいえ、こうした点に関してあらかじめ断っておく方が良識的であろう。

本書はそのような書物ゆえ、それに対するいわゆる網羅的な紹介は相応しくなからう。核心的論点のみに絞って批評を展開したいと考える。

## 1. 論点の整理

すでに述べたような事情ゆえ、網羅的な紹介を割愛して、論点を整理することからはじめよう。先に、本書の論考はいわゆる「価値論」全体にわたっていると述べたが、そうした観点からみると、問題とすべき領域は大きく二つになる。その第1は、狭義の意味での「抽象的人間労働論」にかかわることであり、第2は「価値形態論」をめぐる<sup>2)</sup>。想像できるように、前者の考察が本書の大部分を占めており、また、後者は狭義の抽象的人間労働論からはやや離れる。そこで、本稿ではもっぱら前者に絞って考察を進めたい。

さて、前者においては三つの論点に焦点を絞ることができよう。このことは著者も十分に自覚されている。「このこと（争点—評者）は、結局、＜抽象的人間労働＞を①歴史的カテゴリーとみなすか超歴史的カテゴリーとみなすか、あるいはまた②「生理学的エネルギー支出説」にみられるような自然主義的実在態とみなすか社会的形象態（社会的措定態・物象態）とみなすか、の差異として現れることになるはずである。そしてまた、それは＜抽象的人間労働＞の対象化は、③生産過程において行われるのかそれとも交換過程において果たされるのかという件の係争問題にも深くかかわってくる問題である。」(324頁<sup>3)</sup>。①②③は評者が挿入)、と。

みられるように、著者は、抽象的人間労働の理論ないし概念をめぐる三つの論点を明らかにしている。その第1は、抽象的人間労働が、(α)資本主義ないし商品経済という歴史的カテゴリーなのか、それとも(β)如何なる時代にも存在する歴史貫通的なカテゴリーなのかという問題である。大まかにいえば前者αが廣松説であり、後者βが宇野説である。第2は、先の点とも密接に関係するが、抽象的人間労働は、(α)社会的概念か、それとも(β)自然的概念かという点に関するものである。前者αが廣松説、そして後者βが宇野説に他ならない。そして、第3は、抽象的人間労働の概念が導出されるのは経済学原理論体系においてであることには異論はないが、その領域が、(α)流通論ないし交換過程においてなのか、それとも(β)生産論なのかという点である。ここでも、前者αは廣松の主張であり、後者βが宇野の主張である。

著者は、このように理論的な整理を行うことによって、論点を明確化している。そして、著者の積極説として、抽象的人間労働の「測定可能性」の問題を提起するという論理構成になっている。

以下、これらの諸点に関して、立ち入った検討を行っていききたい。ただ、検討の順序は、第2の論点からとしよう。

## 2. 抽象的人間労働論をめぐって

### (1) 三つの論点

#### 社会的概念か、自然的概念か

まず、抽象的人間労働が社会的な概念か、それとも生理学的な自然的概念かという問題から吟味しよう。

マルクスは、一方で、抽象的人間労働を社会的な概念とする理解を示しつつも、他方では、それを生理学的概念と理解するような規定を示している。

まず前者の例を著者も引用している『資本論』から採ろう。「諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対称性は純粋に社会的であるということを出すならば、価値対象性は商品と商品との関係のうちにはしか現れえないということもまた自ずから明らかである。」(『資本論』 I、64頁<sup>4)</sup>。

この引用は、「第3節、価値形態」の冒頭部分であり、抽象的人間労働を主題的に扱った「第2節、労働の二重性」からのものでない。したがって、マルクスはここでは「価値対称性」に関して記しているのもあって「抽象的人間労働」とは必ずしも明示的に述べていない。しかし、著者は、「この「価値対象性」実体と規定された<抽象的人間労働>に関しても..」(202頁)と述べ、両者を連携させている。そして、これを論拠として、抽象的人間労働は「純粋に社会的である」と主張しているといえよう。ちなみに、『資本論』の他の箇所でも、抽象的人間労働を社会的概念とすると明示的に述べているところは、評者の読むかぎり発見できない。ともあれ、これが抽象的人間労働を社会的概念とする論理である。

だが、著者も採り上げているように、マルクスには抽象的人間労働を生理学的概念とする文言が存在する。こちらの方はきわめて明示的である。「さまざまな有用労働または生産活動がどんなに異なっていようと、それらが人間労働の諸機能だということ、またこのような機能はどれも本質的には人間の脳や神経や筋肉や感覚器官などの支出だということとは生理学上の真理...」(『資本論』96-97頁<sup>5)</sup>、云々。

ここでは、明示的に抽象的人間労働に関して述べられているのもあって、著者のいうように、これが抽象的人間労働を生理学的な自然的概念とみなす論拠の一つだといえよう。しかし、著者はこれを「誤解」であり、これを払拭しなければならないという。「われわれが立ち向かうのは、まさにこのようなマルクスの言辞に依拠し、これをマルクスの最終規定とみなすことで、誤解されてきた<抽象的人間労働>理解である。」(203頁)と。

著者の立場ないし結論は明確である。著者は、問題を、抽象的人間労働が社会的な概念か、それとも生理学的な自然的概念かと設定し、前者の解釈・理解が正当だと主張しているのである。すでに述べたように、前者は廣松理論、後者は宇野理論であると大まかに捉えられる。ただ、その論理の根拠などを含めた、著者の積極的な展開は、ここではみられない。よって、これ以上の具体的な展開は後に譲ることにして、ここでは著者の立場ないし結論を確認するに留めておき、次に移ろう。

### 歴史的範疇か、歴史貫通的範疇か

以上のような、抽象的人間労働を、社会的な概念とみなすか、それとも生理学的な自然的概念とみなすかという問題は、それが、歴史的カテゴリーか、あるいは歴史貫通的カテゴリーかという問題にも繋がる。

いうまでもなく、抽象的人間労働が社会的な概念ならば、その特定の社会すなわち特定の歴史的社會が問題にならざるを得ず、したがって、抽象的人間労働の概念は歴史的カテゴリーということになる。それに対して、抽象的人間労働が生理学的な自然的概念ならば、そこに歴史性の入り込む余地はありえず、よって、抽象的人間労働の概念は超歴史的カテゴリーないし歴史貫通的カテゴリーということになる。

歴史貫通的カテゴリー説の代表の一つとして採り上げられている宇野説について、著者は以下のように述べている。

「宇野流に言えば、あらゆる時代のかつあらゆる形態の労働には抽象的人間労働の側面はあり、たとえ社会関係の編成のあり方がどのように変わろうとも、人間の労働は、それ自体、抽象的人間労働としての共通の質を持つことになる。だからこそ、この労働は「社会的実体」と規定しうるのである。／しかし、留意すべきは、だからといって「すべての労働が価値形成的だ」というわけではない。この労働が価値形成的な機能を有するのは、特殊歴史的な商品経済社会にあってのみである。これ以外の社会においては、抽象的人間労働そのものは実在するが、それは価値形成的ではないし価値の実体として対象化されて表されることもない。」(144頁。／は評者が挿入)。

ここで示されている内容は、前半の抽象的人間労働の定義的な規定と、後半の労働と価値との関係の二つに分けられるが、いずれの宇野理論解釈も正当だといえよう。宇野は、抽象的人間労働を超歴史的なカテゴリーと把握しているが、それと価値との関係については区別すべきものとして把握している。原理論において価値は、まず商品の二要因の一つとして概念化されることから明らかなように、特殊歴史的な概念である。したがって、超歴史的な概念であるとする抽象的人間労働と価値との間には、当然のことながら断絶線が入ることになる。上の引用の後半では、この問題に関して、適切に要約されているといつてよからう<sup>6)</sup>。

こうした紹介の後、「これまでのべてきた従来の「超歴史説」とどう違うかに関しては、ここでは問わない」(146頁)と筆者は述べ、続けて、抽象的人間労働を歴史的カテゴリーとする廣松説の紹介に移っている。

「廣松によれば、＜抽象的人間労働＞とは、生産過程において支出・投下された人間の労働力が生産物に凝固された形で表されたものとして理解されてはならない。つまり、それは、人間の労働力という生理学的エネルギーの対象化されたものとして、つまり客体化された人間労働一般という超歴史的なカテゴリーとして理解されるべきではない、という。／抽象的人間労働とは、通念的に了解されてきた意味での自然的ないし物的な内容において規定されるべき労働ではなく、諸個人の私的に具体的な労働(具体的有用労働)が、その総社会的関係の媒介において、彼らの労働の社会的統合ないし社会的構造化を介して産出された社会的形象態、すなわち前者(具体的有用労働—評者が挿入)とは全く異質の内容において構成・措定された独特の社会的な労働のあり方をいう。」(148頁。／は評者が挿入)。

みられるように、引用の前半は、抽象的人間労働を超歴史的なカテゴリーとして理解されるべきではない、つまり、それを歴史的カテゴリーとして理解すべきであるという定義的な規定である。そのかぎりでは理解できるが、後半の「前者とは全く異質の内容において構成・措定された独特の社会的な労働のあり方」という規定は分かりにくい。このことは、続けて「それ自体としては理念的とでもしかいいようのない特殊な「社会的実体」(148頁)とも表現されているが、これも理解しがたい。この点については後ほどやや異なった形で再論されているので、ここでは疑問を呈することで終わらせたい。

だが、抽象的人間労働に関する次の叙述には目が留まった。「廣松においては…。この概念での二重性規定は、特殊歴史的な労働の二重性の形態規定である。廣松にとって超歴史的な労働の二重性の論理的な規定は「<協働>としての<労働>」という規定である。われわれ流の表現でいえば、諸個人の労働の社会性と個性という労働の一般的規定においてそれは歴史貫通的な論理的規定と理解されるべきだということである。」(150頁)。

「われわれ流の表現」の方はやや分かりにくい、「廣松にとって」の方の解釈をすれば、「<協働>としての<労働>」は超歴史的な労働の二重性もつということであろうか。もしそうならば、廣松によれば、いわゆる労働の二重性は特殊歴史的であり、したがってその一つである抽象的人間労働も特殊歴史的であるが、「<協働>としての<労働>」の二重性は超歴史的であるということになる。そうだとすれば、廣松は、用語法はともかく、労働に関しての何か超歴史的な概念を措定しているのであって、宇野の規定に通ずるものがあるのかも知れない。

#### 流通論で説くべきか、生産論で説くべきか

以上のように、著者は、宇野流の概念に対して、廣松を援用しつつ抽象的人間労働に関するその立場を明らかにしている。この問題はそればかりでなく、それを説く原理論上の位置の問題にも関連する。

周知のように、マルクスは、まず『資本論』の冒頭の「第1節、商品の二要因」において抽象的人間労働を考察している。「労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物的な諸成分や諸形態も捨象することになる。…労働生産物の有用性といっしょに労働生産物に表されている労働の有用性は消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に還元されているのである。」(『資本論』I、51-52頁)、と。これはよく知られているように、いわゆる「蒸留法」と呼ばれる方法によるものである。マルクスは、このように、商品論(流通論)において抽象的人間労働を提出し、概念規定を与えている<sup>7)</sup>。

それに対して、宇野は抽象的人間労働を生産論で規定する方法を提起した。著者の言葉で表現しよう。「これに対し宇野の場合、…「労働＝生産過程」こそあらゆる社会存立・存続のための基本原則(経済原則)が貫徹・具現される過程(「人間生活の絶対的基礎」)であると規定した上で、この過程で行われる労働自体が実は「二重性を持っている」のであって、マルクスの指摘する労働の二重性の事態はここで規定されるべきものとする。」(143頁)。

このような紹介はほぼ正当であろう。ただ、宇野がこうした体系を提起した意義の吟味はみられない。何故、宇野はマルクスの体系に異を唱え、抽象的人間労働論ないし価値論

の論証を生産論の移すことになったのか、こうした点は宇野理論の核心的な問題を孕んでいるので一言で片付けるわけにはいかないが、誤解を恐れずあえていえば、以下のようなのである。それは、マルクスのように流通論において商品と商品の関係から価値そして労働までも透視することは、厳密には不可能であるという点につきる。廣松風にいえば、当事者（商品や貨幣の所有者）が商品を観察してそこに対象化されている労働を透視することは、当然ながらできないことであるが、学知にとってもそれは可能ではないといえよう<sup>8)</sup>。

こうした点に著者は立ち入った検討を与えていないので、とりあえず、ここでも著者の立場を確認しておくことに留めよう。いうまでもなく著者は、ここでも宇野説には批判的である。

## (2)測定問題の提起

これまで、抽象的人間労働に関する三つの論点に関して紹介してきたが、立ち入った検討には至っていない。というのは、何よりも著者のスタンスによる。著者は、このように問題を提起しつつも、その積極的な自説をこれまでは展開していない。それは、これから検討する「表示可能性」ないし「測定性」の問題として一気に披露される段取りになっているからに他ならない。

著者は次のようにいう。「宇野の場合、…＜抽象的人間労働＞は近代科学主義流の直接に可視的な所与的事実として了解されており、従ってまた＜抽象的人間労働時間＞も直接測定可能・直接表示可能という構図になっている。廣松の批判の眼目の一つは、…まさにこの点に向けられているのである。」(322頁)、と。

こうして著者は、以下の宇野の文言を俎上に載せ、積極的な批判を展開する。「……六時間の紡績労働の生産物である六キロの綿糸は、単に六時間の労働の対象化されたものではない。六キロの綿花の生産自身に、例えば二〇時間の労働を要したものとし、また機械の生産にも一定の労働を要し、この綿糸の生産中に消耗せられた部分を例えば四時間の労働の村象化されたものとする、生産手段自身ですでに二四時間の労働を要しているわけである。したがって綿糸六キロは三〇時間の労働の生産物ということになる」(新『原論』(岩波全書版)50-51頁)。

引用の宇野説に対する批判は、一言でいえば、「宇野の場合、価値の実体としての抽象的人間労働の尺度・時間が、いきなり既知の前提として表示されていること…」(325-326頁)につきるが、その具体的な内容は次の2点である。その第1は、「①ある紡績労働者Aの…直接的に個人的に投下された紡績労働1時間と②糸の生産に社会的に必要とされる紡績労働1時間とは同じではない。」(327頁)という点に関してである。つまり、宇野にあっては、同種労働において熟練等の問題が無視されているという批判である。第2は、宇野においては、「社会的に標準的な紡績労働と…綿花生産労働と機械生産労働の生産性は同一ということになる」(328頁)という問題が生ずるということ。つまり、異種労働間では生産性が異なるであって、それを無視することは許されないという批判である<sup>9)</sup>。これが、著者の具体的な宇野批判の骨子とってよかろう。

以上のような批判をさらに一歩進め、著者はここで自説を展開する。宇野は、すでにみたように、綿糸の生産には綿花や機械の生産に要した労働時間を前提し、それらを計算し

て、「綿糸六キロは三〇時間の労働の生産物ということになる」というように例示した。著者は、これを抽象的人間労働時間の「直接的な測定」（335頁）だと論難する。これに対して著者は、その「間接的測定」（335頁）を提起するのである。それは、「廣松流に言えば、「生産に必要な時間の判っている或る生産物との“等価”交換を通じて、相手側の生産物を自分の側の既知の所要時間と等しいと見做すという手続きのこと」（廣松「宇野経済学への視角」）をいう」（335頁）、だと。

宇野の「直接的な測定」と著者の「間接的測定」の差異について、著者は価値形態論の範式を念頭において例解を示しているのです、それを引用しよう（340頁）。

〔表A〕

20エレのリンネル：	}	
紡績労働8時間（抽象的人間労働8時間）＝		
1着の上着：		2オンスの金：
裁縫労働8時間（抽象的人間労働8時間）＝		金製造労働8時間＝Y円
10ポンドの茶：		（＝抽象的人間労働8時間）
茶栽培労働8時間（抽象的人間労働8時間）＝		

〔表B〕

20エレのリンネル：	}	
紡績労働12時間（抽象的人間労働X時間）＝		
1着の上着：		2オンスの金：
裁縫労働10時間（抽象的人間労働X時間）＝		金製造労働8時間＝Y円
10ポンドの茶：		（＝抽象的人間労働X時間）
茶栽培労働13時間（抽象的人間労働X時間）＝		

ここで、〔表A〕は宇野の抽象的人間労働を示す論理構成であり、〔表B〕が廣松および著者のそれであるという。

著者によれば、〔表A〕では、「①「直接的に測定されうる生産過程における社会的に必要な各種労働8時間（＝抽象的人間労働8時間）」→②「1労働時間の表示する価格（1/8Y円）の想定」→③「価値（抽象的人間労働8時間）の価格表現（Y円）」という構図において、「価値→価格」——生産の技術的過程において規定された所与の抽象的人間労働の時間がある一定の任意の価格の大きさに還元されて表示される——の関係が構図化されているということである。」（340頁）とされる。

それに対して、〔表B〕においては、「この表式の左辺に位置する諸商品の価値量は、時計によって直接的にではなく、貨幣商品の使用価値としての一定の大きさ（2オンス＝金製造労働8時間の対象化した貨幣商品の現物形態）でもって、Y円として媒介的・間接的に測定され、このY円は抽象的人間労働時間としてはX時間を表わすと間接表示されているということである。〔表A〕との決定的な違いは、〔表B〕では、前者の場合のように、資本制生産過程における自明の事実前提、すなわち諸労働は異質性を払拭され同質化・同一化された単位労働として社会的共約可能性を獲得して現われる、ということにはな

っていないということである。」(341頁)と説明される。著者の、抽象的人間労働の導出過程とその意味がここで明確にされたといえる。

そして、結論的に著者は以下のように述べている。「宇野の(価値論の一評者が挿入)論証は「必要労働しか実際に行われていない」局面に定位された論証になっていることの問題性はさて措くとして、またそれは「全部門・全企業での『資本の有機的構成』が斉一的であるという経済学におよそ非現実的な条件」(廣松「宇野経済学への視角」)の導入を余儀なくされるのではないかとの嫌疑も今措くとして、われわれのここでの問題設定にとってその最大の難点は、異種・異質な労働の社会的同一性への還元の問題である。」(344頁)、と。

すなわち、宇野は、第1に、価値論の論証においては「必要労働しか」行われていない場面を想定していること(そのような宇野説解釈は正当であるが)、第2に、抽象的人間労働を論ずるにあたっては、全部門・全企業の資本の有機的構成が斉一であるという前提をおいていること(そのような解釈も正当であるが)、そしてそれにも増して第3には、労働の異種・異質性をあろう事か同一なものとしそれを前提としていること、これらが著者の宇野理論批判の内実には他ならない。そして、提起された〔表B〕が、著者の積極的な自説である。すでに引用した「それ自体としては理念的とでもしかいいようなない特殊な「社会的実体」」(148頁)としての抽象的人間労働とは、このX時間で表される抽象的人間労働を意味するものであったといえよう。

### (3) 日山説の検討

これまで、抽象的人間労働に関して、著者の議論を主に紹介してきた。それは、抽象的人間労働なるものが、社会的か自然的か、歴史的か超歴史的か、そして、それが説かれる場面が流通論か生産論か、という3点をめぐるものであつが、それらを集約した著者の積極的な提起は、計測可能性ないし測定問題という論点であった。

そこで、この問題に関して3点に絞って検討を加えたい。

その第1は、著者の積極的な主張である〔表B〕では、幾つかの矛盾が生ずるという点に関してである。著者の主張の眼目は、抽象的人間労働は、流通の場面で導出されるので、たとえば、12時間の紡績労働も、10時間の裁縫労働も、また、13時間の茶栽培労働も、いずれも2オンスの金、そしてX時間の抽象的人間労働として評価されるという点にあった。だが、こうし想定はかなり奇妙なものになろう。

それは労働者の賃金をどのように把握するかにかかっている。マルクス経済学の常識では、少なくとも原理論レベルでは、それは生存賃金として理解されている。明示的には示されていないが、著者もそのように理解されているとしよう。

この例の場合、もっとも賃金率の低い茶栽培労働における賃金が生存賃金であり、1労働日は13時間であるとしよう。そうだとすると、紡績労働や裁縫労働に従事する労働者は、同一労働日を前提にすると、蓄財できることになる。また、またそうではなく、生存賃金が、1労働日10時間の裁縫労働だとすると、同一労働日では、紡績労働者も茶栽培労働者も生存賃金以下になる。いずれにしても、奇妙なことが生じてしまう。著者は、原理論における労働者の賃金は、生存賃金以上でもそれ以下でもあり得ることだと考えているのだ



ろうか。

あるいは、著者は、それぞれの産業部門で労働日が異なることを前提として問題を立てているのだろうか。マルクスは、絶対的剰余価値の生産や相対的剰余価値の生産を論ずると場面では<sup>10)</sup>、1労働日が不変ではない例を示してもいる。しかし、これは、生産部門や産業部門あるいは個別資本毎に労働日が変化することを述べているものではない。階級としての労働者の労働日を問題にしているのである。もちろん、マルクスと異なる説を述べることは何ら差し支えない。しかし、このような生産部門や産業部門あるいは個別資本毎に労働日が異なるというようなことを想定することにどのような意味があるのか。あるいは、原理論体系においてそのような想定は可能なのだろうか。

続いて第2に、宇野説を示したとされる〔表A〕を吟味しよう。著者は、宇野が価値論の論証のさいに綿糸の価値の計算において綿花や機械の生産に要した労働時間を単純に加えたことをもって、異質の労働時間がすべて同質のものと捉えられているとし、この図表を考案したものと思われる。

だが、これは宇野の意図を正確に表したものではない。その解釈としても誤解である。というのは、周知のように、宇野は流通論次元においては、そもそも労働の問題を扱うことができないことを繰り返し強調してきた。既述のように、それは当事者（商品や貨幣の所有者）が商品からそこに対象化されている労働を透視することはできないことであると共に、学知にとってもそれは不可能なことだという意味に他ならない。したがって、宇野理論を〔表A〕になぞって解釈するとすれば、以下ようになる。もっとも、これは宇野の価値形態論の範式とは種々の点で異なるものであり、決して正確に表しているものではないが<sup>11)</sup>...

$$\left. \begin{array}{l} 20 \text{ エレのリンネル} = \\ 1 \text{ 着の上着} = \\ 10 \text{ ポンドの茶} = \end{array} \right\} 2 \text{ オンスの金}$$

みられるように、これはあくまでも形態的表現であって、抽象的人間労働に関しては全く表現されることはない<sup>12)</sup>。繰り返しになるが、流通論においては、価値ないし価格と労働との関連を付けることは不可能だというのが宇野の理論である。したがって、宇野理論を〔表A〕として表し、それを論難することは残念ながら的はずれだといわざるを得ないのである。

さて、第3の点に移ろう。すでに〔表A〕、〔表B〕を吟味してきたが、その根底をなす原理論体系ないしはその生産論の構造について、本件とかかわるかぎりでは、検討しておきたい。

著者は、宇野が価値論の論証にあたって必要労働しか行われていない局面を前提にしていること<sup>13)</sup>、生産論において資本の有機的構成が全資本ですべて等しいとしていること、また、異種・異質な労働を同一ものへ還元していることについて、繰り返し疑問を提起してきた。こうした点をどのように考えるべきかという問題を論じておきたい。

宇野が労働の問題を生産論に移行させたことは周知の通りだが、その生産論における資本や労働はどのようなものとして把握されているのか。流通論次元では登場する主体は商

品や貨幣の個別的所持者であったが、生産論においては資本家や労働者はそのような個別主体ではない。結論を先取りすれば、それは、代表単数としての資本家や労働者である。あるいは総体としての資本家や労働者といってもよい<sup>14)</sup>。というのは、生産論の課題の一つは、資本と労働によって、どのように価値が規定され、剰余価値が生ずるかを明らかにすることであり、この次元では、資本家も労働者も代表単数として登場するといつてよい。よって、労働者間はもとより、資本家間の競争も当然ながらありえない。

また、著者は廣松を援用しつつ、「全部門・全企業での『資本の有機的構成』が斉一的であるという経済学におよそ非現実的な条件」を、宇野が導入していると論難した。むしろ現実には個別資本において資本の有機的構成が異なることは当然である。原理論を通して労働者は同質であるが、資本家はそうではない。諸資本家は産業部門内、産業部門間で異なるのであり、ここから競争が生まれるが、そうした問題は、第2編ではなく、第3篇の利潤論以降で展開される体系構成になっている。

こうした原理論の体系構成を無視して、資本家間の競争を生産論に持ち込むことは、議論を混乱させるだけである<sup>15)</sup>。これでは、肝腎の階級関係の解明が不可能になろう。生産論の課題の一つは、価値どおりの交換を前提にした中で如何にして剰余価値が形成され、したがって、資本家と労働者の階級関係が如何にして再生産されるかの考察にある。

### 3. 結びにかえて

かなり長時間にわたって分厚い本書と格闘し、評者なりの理解を示したものが以上である。みられるように、結果的には著者に対する批判が大部分を占めてしまった。大先輩に対して、大変失礼なことをしたかも知れない。書評というより論争と呼ぶに相応しいものになった。だが、著者はつまらない褒め殺しより、こうした議論の方を待ち望んでおられると拝察する。議論の進展には批判や反批判は不可欠なのだから…。しかし、これを学派対立と誤解していただきたくない。あくまでも評者の見解である。

ところで、これまで書評という形式ゆえ、評者の自説に関しては積極的には述べてこなかった。その点について簡単に触れておきたい。

抽象的人間労働をめぐって、著者が提出された「三つの論点」は誠に的を射たものである。評者も論点はこの3点に集約可能だと考える。そこで、それに沿って、評者の自説を開陳しよう。まず、抽象的人間労働の定義的な概念規定であるが、評者はそれを社会的概念に近いものだと考える。また、その歴史性の問題においては、基本的には特殊歴史説を採る。これらの点においては、宇野説とは一致しない。だが、それは、第3の争点とも関係するが、宇野の提起した生産論で抽象的人間労働を規定するという方法によって得られる結論だと考える。宇野は、抽象的人間労働を生産論で展開したが、さらに立ち入ってみると、それは「労働過程」ではなく「生産過程」の中で説かれている。その方法的意義を検討することによって、導かれたものである。かつて評者は「抽象的人間労働」<sup>16)</sup>という論考を公にしたことがある。すでに四半世紀も前のものだが、以上のような議論はここで展開されているので、お読みいただければ幸甚である。

ともあれ、本書が近年まれにみる大著であることは紛れもない事実であることを再び確認して稿を閉じることにしたい。

1) 田中史郎「廣松渉『資本論の哲学』を読む—価値形態論を中心として—」、『社会理論研究』社会理論学会、第6号、2005年)を参照されたい。なお、本稿は中国語に翻訳されている(『社会批判理論紀事』第1輯、中国・中央編訳出版社、2006年)。

2) 著者の価値形態論は、評者のそれとはその課題や前提から異なっているようである。評者は価値形態論の課題は何よりも「貨幣の導出にある」と考えており、したがって、この次元では商品の交換は成立していないことを前提する。なぜならば、たとえば価値形態論の第1形態でリンネル所有者がその一定量をもって1着の上衣を求めたとき、それが成就すればそれで事足りるのであって、貨幣の必然性は何処にもない。だが、商品経済ではそうしたことは殆ど起こりえない。価値形態論とは商品と商品の交換の不可能性が貨幣を成立させる論理であると考ええる。

しかし、著者にはたとえば次のような認識がある。「もともと「価値形態論」における全ての範式は、本質的にリンネル商品の側の独りよがりの主観的価値表現としてではなく、...諸商品の汎通的・全面的で客観的な、つまり総社会的に妥当する交換関係を表記するもの...」(417頁)、云々。ここで想定されていることは、貨幣の存在しない状況で商品交換がすでに終了している事態であろう。

価値形態論の課題が貨幣を導出するところにあるか、否か、という類のことから議論をするには別稿を準備するほかない。なお、この間の価値形態論をめぐるサーベイについては、田中史郎「価値形態論の現在—主に1980年代以降の研究を対象として—」(『状況と主体』谷沢書房、第280号、1999年4月)を参照されたい。

ところで、価値形態論の課題は第一義的には「貨幣の導出にある」が、その論理は広く応用が可能であろう。価値形態論とは、一般的にいわれる「第三項」を導出する過程の論理ともいえる。商品と商品の二項対立から貨幣が導出されること、つまり三項図式の成立によって価格表示そして売買が可能になるが、それは、いわば商品世界というカオスから商品—貨幣世界というコスモスが形成される論理と読み替えることが可能だからである。著者も参考にされている今村仁司(『暴力のオントロジー』勁草書房、1982年)をはじめ、さまざまな応用の試みがなされている。青木孝平(『資本論と法原理』論創社、1984年)、柄谷行人(『マルクス—その可能性の中心』講談社、1978年)、高橋洋児(『物神性の解説』勁草書房、1981年)、三浦つとむ(『日本語とはどういう言語か』季節社、1971年)、浅田彰(『構造と力』勁草書房、1984年)など。もっとも、以上の諸論者の価値形態論の捉え方は若干ずつ、しかし決定的に異なるものであり、一括することはできない。なお、今村理論に対する批評として打利文生(書評「今村仁司著『暴力のオントロジー』、『カフーツ』①、白順社、1990年)を参照されたい。

3) 特に断りのないかぎり、頁数はすべて本書のそれである。

4) 『資本論』Iからの引用は、『マルクス・エンゲルス全集』第23巻(大月書店)の頁数をもって示す。

5) 著者の引用箇所は「第4節、物神性」からのものだが、この問題を主に扱った「第2節、労働の二重性」にも、ほぼ同様な文言が認められる(『資本論』I、59-60頁、63頁を参照されたい)。

6) 原理論において、価格と価値と労働との三者の関係について、議論されることがある。宇野は、価格と価値とはかなり隣接した次元の事柄だと把握し、価値と労働との間にはかなりはっきりとして次元的な区別をしているように思われる。

7) 著者は、抽象的人間労働を流通論で規定する方法を堅持しているが、『資本論』におけるような蒸留法を支持しているわけではなさそうである。

8) もちろん、どのような「学知」を設定するかにもよるが、廣松流の学知——当事者に寄り添いながら議論を進める黒子としての学知——においては、流通論の相で、商品や貨幣から労働を透視

することは不可能であろう。

9) 著者は、この他にも「各生産部門間の資本の有機的構成の差異」(328頁)の問題についても言及しているが、これは、第2の問題に含まれると解釈しているようなので、本文では、問題を二つに絞った。

10) 『資本論』Iの第3、4、5篇を参照されたい。

11) この範式は『資本論』の貨幣形態のそれに近いが、宇野の貨幣形態は種々の点でそれとは異なっている。宇野の貨幣形態の範式は、「鉄1トン=金2オンス / 上衣1着=金1オンス / 小麦1クオター=金3/4オンス」のように示されている。みられるように左辺の数量がすべて1単位になっており、それに対応して右辺の数量はそれぞれ異なった値を指している。さらに、貨幣形態では、それまでと異なり左辺・右辺とも「商品名、数量」の順で表現されている。これらは些細なことのようにだが、第1形態から辿ると、その意味が明らかになってこよう。なお、この点に関しては、田中史郎『商品と貨幣の論理』(白順社、1991年)第2篇を参照されたい。

12) このことは、流通論次元に登場する商品が必ずしも労働生産物ではないということを含意している。むろん、そうした商品を中心に据える必要はないが、それを排除する論理は存在しない。原理論体系的に言えば、生産論に移行するとき、これらの商品から非労働生産物が抜け落ちる構造になっているといえよう。

13) 宇野が価値論の論証にあたって必要労働しか行われていない局面を前提にしていること、つまり、「価値形成過程」においてそれを行っていることについて補足しておこう。剰余が存在しないことを前提にして、労働者の労賃による生活資料の買い戻しによって、商品の価値と労賃とが同時決定するというのが宇野の論証方法である。いわば「補填原理」によって精確に買い戻し関係が成立するという論理である。それに対して、仮に剰余がある場合には、その部分には補填原理が働かないのであって、価値に幅ができることになる。これでは厳密な意味での論証にならないというのが宇野の意図であり、価値論の論証を価値形成過程で行った所以であろう。剰余の部分は「競争原理」によって処理されるといってよかろう。

14) 生産論における資本は原則的には代表単数として把握するが、特別剰余価値を説くさいにはこの原則からはみ出す部分がある。今後検討を要しよう。

15) 経済学全体やその原理論を体系的に把握するということは、理解されにくいのだろうか。たとえば、雨粒の落下の考察のような自然科学の場合を考えてみよう。どのように精密に観察しても雨粒は、絶えず風(空気)の抵抗を受けているから、地表に鉛直に落下することはありえない。しかし、重力による自然落下を説明するには、「雨粒はいつも斜めに落下する」といっても意味がない。このような場合には、まずは空気抵抗を無視して(同様のことだが、雨粒には体積がないもの、つまりそれを質点と抽象化し把握して)純粋に重力の作用のみを考察する、そしてその後に空気などのノイズを加味して、実際の観察に近いデータを分析するという方法が採られるであろう。経済学の原理論の想定する純粋資本主義は、それを比喩的に表せば、空気抵抗のない世界、あるいは登場する人は質点としての人ということである。そして、原理論の流通論、生産論、分配論(総過程論)での質点は、それぞれ流通主体、代表単数、競争する主体というように性格の異なる質点として登場するといえよう。

16) 田中史郎「抽象的人間労働——その導出過程と意義——」(『東経大論叢』第4号、東京経済大学大学院、1983年)を参照されたい。